

教職科目「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」に おける「代表的な教育家」についての計量書誌分析

藤井基貴* 上地香杜** 御代田桜子**

A Bibliometric Analysis on “The Key Educators” in the Teacher Training Course: “Educational Ideas, History and Thought”

Motoki FUJII Koto KAMIJI Sakurako MIYOTA

要旨

本論文の目的は、2017年度に示された教職課程コアカリキュラムにおける「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」の「(3) 教育に関する思想」:「到達目標: 3」「代表的な教育家の思想を理解している」に注目して、現在どのような思想家が「代表的な教育家」として同授業科目で扱われているのかを明らかにすることにある。分析対象としたのは大学の授業シラバス及びそこで指定されている教科書である。

その結果、1) シラバスにおける記載頻度が高いのはルソー、デューイ、ペスタロッチ、ロック、ヘルバルト、コメニウス、フレーベル、デュルケーム、カントらであった。2) 指定された教科書においては、記述の分量や頻度に差はあるものの898名の思想家・人物が幅広くとりあげられていた。3) 加えて、限定的とみられてきた現代思想の影響については、指定された教科書においては数名以上の人物がとりあげられていることが確認された。

キーワード

教育の理念、教育史、教育思想、教育哲学、教育原理、代表的な教育家

1. はじめに

2015(平成27)年の中央教育審議会「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について(答申)」において、「…国の策定指針を踏まえ、大学が教職課程を編成するに当たり参考とする指針(教職課程コアカリキュラム)を関係者が共同で作成することで、教員の養成、研修を通じた教員養成における全国的な水準の確保を行っていくことが必要である」と記され

たことを受けて、2016(平成28)年8月「教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会」が文部科学省に設置され、2017(平成29)年には教職課程コアカリキュラム(以下、コアカリキュラム)が公開されるにいった。

コアカリキュラムは新たに設置される教職科目を加えて全19科目が作成された。コアカリキュラムは、「地域や学校現場のニーズや大学の自主性や独自性が教職課程に反映されることを阻害するものではなく、むしろ、それらを尊重した上で、各大学が責任を

*静岡大学教育学部 **名古屋大学大学院

もって教員養成に取り組み教師を育成する仕組みを構築することで教職課程全体の質保証を目指すもの」という趣旨のもとで、学生が修得する資質能力である「全体目標」と、それをさらに分化させた「一般目標」、「一般目標」ごとに学生が達成すべき個々の規準とし

ての「到達目標」から構成されている。

本論文が対象とする「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」の科目については表1のようにまとめられる。

表1 教育の基礎的理解に関する科目：「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」

全体目標： 教育の基本的概念は何か、また、教育の理念にはどのようなものがあり、教育の歴史や思想において、それらがどのように現れてきたかについて学ぶとともに、これまでの教育及び学校の営みがどのように捉えられ、変遷してきたのかを理解する。

(1) 教育の基本的概念

一般目標： 教育の基本的概念を身に付けるとともに、教育を成り立たせる諸要因とそれら相互の関係を理解する。

到達目標： 1) 教育学の諸概念並びに教育の本質及び目標を理解している。

2) 子供・教員・家庭・学校など教育を成り立たせる要素とそれらの相互関係を理解している。

(2) 教育に関する歴史

一般目標： 教育の歴史に関する基礎的知識を身に付け、それらと多様な教育の理念との関わりや過去から現代にいたるまでの教育及び学校の変遷を理解する。

到達目標： 1) 家族と社会による教育の歴史を理解している。

2) 近代教育制度の成立と展開を理解している。

3) 現代社会における教育課題を歴史的な視点から理解している。

(3) 教育に関する思想

一般目標： 教育に関する様々な思想、それらと多様な教育の理念や実際の教育及び学校との関わりを理解している。

到達目標： 1) 家庭や子供に関わる教育の思想を理解している。

2) 学校や学習に関わる教育の思想を理解している。

3) 代表的な教育家の思想を理解している。

そもそも同科目は、1987年以前まで「教育原理」という名称で「教職に関する専門教育科目」の一つとして設置されてきた。それが1988(昭和63)年の改正によって「教育の本質と目標に関する科目」と名称変更され、さらに1998(平成10)年の改正時に「教育

の基礎理論に関する科目」の一領域を担う「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」へと事項区分され、現在にいたっている。

これまでも同科目で扱うべき事項についてはさまざまな議論がなされてきた。1978(昭和53)年に国立教

育研究所によってなされた調査によれば、同科目の内容においては「マスコミでとりあげられている教育問題を講義」、「教育学序論的なものと単純にわりきって講義」、「『エミール』などを主に話している」というように「扱い方に相当の差が認められる」状況にあった（牧、1992）。また、1955年から1979年までに出版された「教育原理」という名称を有する教科書129冊の分析成果によれば、その内容は「①教育の本質（意義・目的）、②教育の内容、③教育の方法、④教育の制度・政策・行政、⑤教師論もしくは教職論」というように専門知識の幅が広く、そうした多様な領域をカバーするために教科書が共著で刊行される傾向にあったという（牧、1992）。

1980年代に入ると教育学界においてもポストモダン思想が新たな潮流を生み出したが、同科目の教科書における影響は限定的なものと報告されている（知念、2017）。また、1998（平成10）年の改正以降、教育の歴史や思想を扱う割合は増加傾向にあり、2000年代に入ると、教育哲学・思想関連の学会においても「教育学における古典（カノン）」をめぐる論議が積み重ねられている（矢野、2010 綾井、2015 下司、2016）。ただし、こうした議論がどれほど大学の教職課程の授業において反映されているかについては具体的な検討はなされてこなかった。

本論文では、上記コアカリキュラムにおける「(3) 教育に関する思想」の「到達目標：3」「代表的な教育家の思想を理解している」に注目して、教職課程において「代表的な教育家」として現在どのような人物が扱われているのかを考察するために、近年の授業シラバス及びそこで指定されている教科書の分析を行う。

2. 分析の方法

先述の通り、本論文ではコアカリキュラムにおける「(3) 教育に関する思想」の「到達目標：3」「代表的な教育家の思想を理解している」に注目して、教職課程において「代表的な教育家」として現在どのような人物が扱われているのかを考察する。そのために、「教育の基礎的理解に関する科目」の授業シラバス（以下、シラバス）及び、そこで指定されている教科書を分析対象とする。なお、シラバスの様式によっては、教科書と参考書の区分が設けられていない場合もあるため、本論文ではシラバス欄の「教科書」または「教科書・参考書」に記載されているものを便宜上、教科書と表記する。

シラバスには、大学で教えられる授業の概略が示さ

れているため、授業で何が教えられているのかを明らかにするための分析対象としてシラバスが用いられることがある（田中・岩治 2017 など）。本稿においても、シラバスを対象として、授業でとりあげられている具体的な人物を明らかにする。加えて、シラバスに掲載されている教科書も分析することで、授業で扱う内容の深さや広がりについても検討する。なお、シラバスに記載されている人物の多くは思想家であるが、教科書においては思想家や教育家以外の人物も記載されているため、分析の際には便宜的に思想家・人物と併記した。

分析対象となるシラバスは、以下の表2で示す条件から選定している。

表 2 シラバスの選定条件

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1) 2016年度に課程認定を受けた「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」の授業シラバス 2) 2017年度に関連学会の理事等が担当している同授業のシラバス*1 3) 1) と 2) のうち2単位ではなく、1単位で開講されている授業は除外した |
|--|

（*1 関連学会として教育史学会・教育哲学会・教育思想史学会をとりあげ、各学会の理事を始め、長年貢献されてきた会員の担当する「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」に関わるシラバスを対象とした。）

以下では、2016年度に課程認定を受けた「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」の授業シラバスを「認定シラバス」、2017年度における関連学会の理事等が担当している授業のシラバスを「学会シラバス」と便宜上、表記する。

「認定シラバス」と「学会シラバス」の両方を分析対象とした理由は、授業担当者の専門性の違いを考慮するためである。「認定シラバス」は直近の課程認定に通ったシラバスであるが、授業担当者の専門は、教育史・教育哲学だけではなく、教育方法や教育社会学など多岐にわたっている。一方、「学会シラバス」は教育史学会・教育哲学会・教育思想史学会の会員が対象となる。そのため、これらの現在の研究状況もある程度反映された、より専門性の高い内容が扱われていることが予想される。両者の差異を考慮することで、「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」の授業において扱われている内容の幅を検討することを目指す。

教科書は、次の表3で示した条件に基づき、選定した。その結果、シラバスは計41、教科書は計48冊が分析対象となった。

表 3 教科書の選定条件

- | |
|--|
| 1) 選定したシラバス内の「教科書」「テキスト」「参考書」欄に掲載されているもの |
| 2) 1) のうち、事典類及び新書は除外 |

分析方法は以下の通りである。

まず、シラバス分析に際しては、掲載されている思想家・人物の名前を抽出し、記載回数を求める。それにより、授業で扱われている「代表的な思想家」を明らかにする。

次に、教科書分析に際しては、目次と索引に注目する。目次は、シラバスと同様に、目次欄に記載されている思想家の名前を抽出し、それぞれの思想家の記載回数を求める。索引は、索引に記載されている思想家・人物を抽出し、記載ページ数の総計を求める。ただし、シラバス・教科書に記載があったからといって、その思想家・人物が必ず授業内でとりあげられているとは限らない。とりわけ教科書に記載されている思想家・人物は授業で逐一解説がなされている訳ではないであろうが、本論文では扱いうる思想家・人物としてすべてを列記した。

こうした前提とともに、本論文では「代表的な思想家」の記載回数を量的に把握したうえで、教科書の索引の分析では記載ページ数を把握することを通して取り上げられている思想家を質的にも把握することを試みる。なお、選定した教科書のなかで索引の無い教科書は分析対象から除外した。また、認定シラバスと学会シラバスに記載されている教科書では、7冊の重複が認められた。分析対象をまとめたものを表 4、巻末に資料 1 として示す。

表 4 分析対象としたシラバス・教科書の総数

	認定シラバス	学会シラバス	計
シラバス	25	16	41
教科書	25	23	48*2

(*2 48 冊のうち、7 冊は重複。)

以下では、課程認定大学のシラバス・教科書と関連学会のシラバス・教科書をそれぞれ分析することを通して、思想家・人物の掲載量の把握から「代表的な教育家」を明らかにする。

3. 課程認定大学のシラバス・教科書にみる「代表的な教育家」

3.1. シラバスの分析

表 5 は認定シラバスに記載されていた思想家の名前と記載回数である。

表 5 思想家と記載回数 (認定シラバス)

順位	思想家名	記載回数
1	ルソー	7
2	デューイ	6
3	ペスタロッチ	5
4	ロック	4
4	ヘルバルト	4
4	コメニウス	4
7	フレーベル	3
7	デュルケーム	3
9	カント	2
9	プラトン	2
9	ソクラテス	2
9	シュタイナー	2
9	コンドルセ	2

分析対象とした 25 のシラバスは、総授業時間数は 375 時間で、シラバスに記載のある思想家の総数は 24 名であった。記載回数をもっとも多いのはルソーの 7 回、続いてデューイ (6 回)、ペスタロッチ (5 回)、ロックとヘルバルト、コメニウス (4 回) である。シラバスに思想家の名前が直接記載されているということは、授業時間内で、その思想家が扱われていることを端的に意味する。表 5 に示されるとおり、西洋思想の源流となる古代ギリシャのソクラテスやプラトン、西洋教育思想の中心的人物であるコメニウス、ロック、ルソー、ペスタロッチ、講壇教育学に貢献を果たしたヘルバルト、新教育運動に多大な影響を与えたデューイ、オルタナティブ教育のシュタイナー、社会学者として教育にも関わりの深いデュルケームらの名前がシラバスに記載されている。その一方で、日本の思想家についてはシラバスでの記載は確認できなかった。

3.2. 教科書の分析

次に分析対象とするのは、シラバスに掲載されている教科書である。ここでの教科書とは、シラバスにて「教科書」「テキスト」「参考書」の欄に記載されていた図書を指す。分析対象は教科書における目次と索引 (もしくは人名索引) である。シラバスに掲載されていた教科書計 25 冊からは目次に登場する思想家を、索引のついている 15 冊からは索引に登場する思想家を抽出し、分析を行なった。

3.2.1. 教科書の分析①目次

まず、シラバスに掲載されている教科書及び参考書の目次を参照して、そこに記載されている思想家を確認する。分析対象は、25 冊の教科書である。25 冊の目次から、掲載されている思想家の総数は 48 名であった。

表 6 教科書の目次に掲載されている思想家・人物
(認定シラバス)

順位	思想家・人物名	掲載回数
1	ペスタロッチ	13
2	ルペルチェ	10
2	ブルーナー	10
4	ルソー	7
5	フレーベル	4
6	ロック	3
7	デューイ	2
7	モンテッソーリ	2
7	ハーバーマス	2
7	マルクス	2

掲載回数が2回以上であった11名を示したのが上記の表6である。もっとも記載回数が多かったのは、ペスタロッチの13回である。以下はルペルチェとブルーナー(10回)、ルソー(7回)と続く。掲載されている思想家は、シラバスと同様に時代背景や、それぞれの持つ思想や立場も異なっている。また、教科書における掲載回数は1回であったものの、シラバスでの記載は上位にあったヘルバルトのほか、日本人の教育関係者として及川平治、大橋訥庵、西田幾多郎、服部四朗らも記載されている。

3.2.2. 教科書の分析②索引

次に、認定シラバスに記載されている教科書の索引に記載されている思想家・人物を抽出し、あわせてページ数を確認する。認定シラバスに記載されている教科書のうち、索引があるものは15冊であり、その索引に記載されている思想家・人物の総数は619名であった。それらのうち掲載冊数が多い順に並び替えて示したのが表7である。

表 7 教科書に掲載されている
思想家・人物上位16名(認定シラバス)

順位	思想家・人物名	掲載冊数
1	デューイ	15
2	ペスタロッチ	14
2	コメニウス	14
4	ルソー	13
5	カント	11
6	ヘルバルト	10
7	デュルケーム	9
7	プラトン	9
7	ソクラテス	9
7	福沢諭吉	9
7	森有礼	9
12	ロック	8

12	フレーベル	8
12	ヴィゴツキー	8
12	コンドルセ	8
12	ポルトマン	8

619名の思想家・人物のうち、掲載冊数をもっとも多かったのは、デューイ(15冊)で全ての教科書に登場している。次に多かったのはペスタロッチ(14冊)、コメニウス(14冊)であり、ルソー(13冊)、カント(11冊)、ヘルバルト(10冊)と続く。ルソー、デューイ、ペスタロッチは、シラバスにおいても記載回数が多かった思想家である。

続いて、掲載されている思想家を掲載ページ数の多かった順に並び替えたのが表8である。掲載ページ数をもっとも多かったのは、ルソー(79頁)である。次いで、ペスタロッチ(60頁)、フレーベル(59頁)、デューイ(58頁)と続く。

表 8 掲載ページ数の上位15名(認定シラバス)

順位	思想家・人物名	掲載ページ数の合計
1	ルソー	79
2	ペスタロッチ	60
3	フレーベル	59
4	デューイ	58
5	コメニウス	45
6	カント	43
7	プラトン	39
8	フッサール	36
9	メルロ＝ポンティ	33
10	ヘルバルト	28
10	ソクラテス	28
12	イリイチ	25
13	フィンク	22
14	ロック	21
15	アリエス	20
15	アリストテレス	20
15	ワロン	20

続いて、掲載冊数と掲載ページ数の値を用いて、1冊あたりの掲載ページ数を算出した。対象となった教科書群において、1冊あたりの掲載ページ数をもっとも多かったのは、メルロ＝ポンティ(33頁/冊)であった。続いてフィンク(22頁/冊)、フッサール(18頁/冊)、ガダマー(18頁/冊)、ヴァーゲンシャイン(8頁/冊)、トイニッセン(8頁/冊)となっている。これら上位を占めた思想家は、フッサール(2冊)を除いて、掲載冊数が1冊であった。

すなわち、掲載冊数が1冊であるにもかかわらずページ数が多いものが上位にランクインする傾向が認め

られた。また、登場する冊数が1冊以下の思想家・人物は453名で、全体の7割を超えていた。

そこで、掲載冊数が1冊のみであるものを除外し、再度1冊あたりの掲載ページ数を算出した結果が表9である。

表9 1冊あたりの掲載冊数の上位15名
(認定シラバス)

順位	思想家・人物名	頁/冊	掲載冊数
1	フッサール	18.00	2
2	フレーベル	7.38	8
3	キケロ	6.33	3
4	ルソー	6.08	13
5	アウグスティヌス	5.33	3
6	ワロン	5.00	4
7	プラトン	4.33	9
8	ペスタロッチ	4.29	14
9	カント	3.91	11
10	デューイ	3.87	15
11	ヘーゲル	3.67	3
12	イリイチ	3.57	7
13	ルター	3.50	4
13	シラー	3.50	2
13	トマス・アクティナス	3.50	2
16	アリストテレス	3.33	6
16	ホメロス	3.33	3

1冊あたりの掲載ページ数をもっとも多かったのが、フッサール(18頁/冊)である。次いで、フレーベル(7.38頁/冊)、キケロ(6.33頁/冊)、ルソー(6.08頁/冊)の順になっている。フッサールは、掲載冊数が2冊であったにもかかわらず多くのページを割いて紹介されていた。

その他、上位にランクインしていたのは、フレーベル、ルソー、ペスタロッチ、カント、デューイなどであり、掲載冊数でも上位にあったものと一定の関連が認められた。

4. 関連学会の学会シラバス・教科書にみる「代表的な教育家」

4.1. シラバスの分析

次に、関連学会の理事等によるシラバスを検討する。関連学会の会員から、16名のシラバスを選定した。シラバスに掲載されていた思想家は9名であり、それぞれの登場回数は表10の通りである。思想家の数は限られているものの、認定大学のシラバスと同様にデューイ(3回)、ルソー(2回)が上位にある。

表10 思想家と登場回数(学会シラバス)

順位	思想家名	登場回数
1	デューイ	3
2	ルソー	2
3	モンテッソーリ	2
4	ペスタロッチ	1
4	ヘルバルト	1
4	コメニウス	1
4	フレーベル	1
4	カント	1
4	ケイ	1

4.2. 教科書の分析

次に学会シラバスに掲載されていた教科書について分析を行なう。教科書のうち、目次と索引を分析対象とした。シラバスに掲載されていた教科書の全23冊から、それらの目次欄に記載されている思想家と、索引に記載されている思想家を抽出したうえで、分析を行なった。

4.2.1. 教科書の分析①目次

教科書の目次欄に記載されている思想家・人物は12名であった。それを示したのが、表11である。2回ずつ記載されていたのがコメニウスとシラーのみであり、そのほかの思想家・人物(10名)は1カ所のみ記載であった。

表11 教科書の目次に掲載されている思想家・人物
(学会シラバス)

順位	思想家・人物名	掲載回数
1	コメニウス	2
2	シラー	2
3	フレーベル	1
4	プラトン	1
5	ジンメル	1
6	フンデルトヴァッサー	1
7	仲本正夫	1
8	鈴木正気	1
9	カスパー・ハウザー	1
10	山田洋次	1
11	無着盛恭	1
12	大西忠治	1

認定シラバスでは上位に名前が挙がったルソーやデューイは学会シラバスでは確認できなかった。ただし、学会シラバスでは表12、13で示すように、ルソーとデューイの原典が教科書として指示されている。

表 12 教科書として示された原典
(認定シラバス)

	著者	書籍名
認定シラバス	ポルトマン	『人間はどこまで動物か』 岩波新書
	ルソー	『エミール』 (上・中・下) 岩波文庫
	アリエス	『<子供>の誕生』 みすず書房

8	アリエス	8
8	フーコー	8
8	ブルデュー	8
12	ロック	7
12	ヘルバルト	7
12	フレーベル	7
12	アリストテレス	7
12	コンドルセ	7
12	森有礼	7

表 13 教科書として示された原典
(学会シラバス)

	著者	書籍名
学会シラバス	ルソー	『エミール』(上・中・下) 岩波文庫
	デューイ	『学校と社会・子どもとカリキュラム』 講談社学術文庫
	フーコー	『監獄の誕生：監視と処罰』 新潮社
	モレンハウアー	『忘れられた連関 (教える-学ぶ)と は何か』 みすず書房

715名の思想家・人物のうち、掲載冊数をもっとも多かったのは、コメニウス(12冊)で全ての教科書に登場していた。次に多かったのは、ルソーとデューイ(いずれも11冊)、カント、プラトン、イリイチ、ピアジェ(いずれも9冊)である。また、次いで、8冊に掲載されていたのが、ペスタロッチ、アリエス、フーコー、ブルデューであった。

続いて、715名の思想家を掲載ページ数の多かった順に並び替えたのが表15である。もっとも掲載ページ数が多かったのは、ルソー(53頁)である。次いで、シラー(48頁)、ジンメル(44頁)、プラトン、デューイ(いずれも42頁)と続く。ルソーは、掲載冊数においても掲載ページ数においても、掲載量をもっとも多かった。

表 15 教科書の掲載されている
思想家・人物の掲載ページ数(学会シラバス)

順位	思想家名・人物	掲載ページ数
1	ルソー	53
2	シラー	48
3	ジンメル	44
4	デューイ	42
4	プラトン	42
6	コメニウス	38
6	カント	38
8	フンデルトヴァッサー	34
9	ペスタロッチ	32
10	フーコー	29
11	ソクラテス	25
12	ヘルバルト	23
12	フレーベル	23
14	アリエス	22
15	イリイチ	21
15	アリストテレス	21

4.2.2. 教科書の分析②索引

次に、学会シラバスに記載されている教科書の索引に登場する思想家、それぞれの思想家が記載されているページ数を確認する。学会シラバスに記載されている教科書のうち、索引があるものは12冊であり、その索引に掲載されている思想家・人物の総数は715名であった。

まず、715名の思想家・人物の掲載されている冊数をまとめ、上位から順に示した(表14)。

表 14 教科書の索引に掲載されている思想家・人物
(学会シラバス)

順位	思想家・人物名	掲載冊数
1	コメニウス	12
2	ルソー	11
2	デューイ	11
4	カント	9
4	プラトン	9
4	イリイチ	9
4	ピアジェ	9
8	ペスタロッチ	8

さらに、掲載冊数と掲載ページ数の値を用いて、1冊あたりの掲載ページ数を算出した。1冊あたりの掲載ページ数をもっとも多かったのは、フンデルトヴァッサー(34頁/冊)である。次いで、ジンメル(22頁/冊)、

ツィンネッカー（16 頁/冊）、ボルツ（13 頁/冊）の順にランクインした。これらは、掲載冊数の順位が全て 100 位以降のものであった。つまり、一部の教科書で多くのページが割かれていた。掲載冊数が 1 冊以下の思想家・人物は 501 名で、全体の 7 割を超えている。

表 16 掲載冊数 1 冊のものを除いた教科書の掲載されている思想家・人物の掲載ページ数
(学会シラバス)

順位	思想家・人物名	頁/冊
1	ジンメル	22.00
2	シラー	12.00
3	ボルツ	7.00
4	キケロ	6.33
5	ルター	6.00
6	アウグスティヌス	5.33
7	ルソー	4.82
8	プラトン	4.67
9	ルーマン	4.33
10	カント	4.22
11	ソクラテス	4.17
12	ペスタロッチ	4.00
13	デューイ	3.82
14	ベンヤミン	3.67
15	フーコー	3.63

そこで、掲載冊数 1 冊のものを除き、再度 1 冊あたりの掲載ページ数を算出した。その結果が次の表 16 である。ここで 1 冊あたりの掲載ページ数をもっとも多かったのが、ジンメル（22 頁/冊）である。次いで、シラー（12 頁/冊）、ボルツ（7 頁/冊）、キケロ（6.33 頁/冊）であった。プラトンやカントといった掲載冊数の多い思想家は上位とはならなかった。掲載冊数の多い思想家ほど上位にランクインする傾向は認定シラバスよりもやや弱かったといえる。

5. 分析のまとめ

直近の課程認定大学及び関連学会の学会員のシラバス及び教科書に記載されている思想家の名前と登場回数を中心に整理・検討を行った。すべてのシラバスのなかで掲載回数が 3 回以上あるのは上位から順に、ルソー、デューイ、ペスタロッチ、ロック、ヘルバルト、コメニウス、フレーベル、デュルケーム、カントであった。シラバスにおいては思想家の数は限定されるが、指定された教科書まで分析の対象を広げると、898 名の思想家・人物の名前が確認された。記載頻度の高かった思想家はソクラテス、プラトン、コメニウス、ロック、ルソー、カント、ペスタロッチ、ヘルバルト、デューイ、シュタイナーらであった。一方、記

載回数が 4 冊以下の思想家・人物は認定シラバスでは 575 名、学会シラバスでは 668 名であった。このことが意味するのは、扱われている思想家・人物が幅広く、また一部への集中や偏りがあるということである。

これらをふまえると、「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」における「代表的な教育家」として上述の一群の思想家を挙げることができる一方で、教科書執筆者の関心に応じてかなり幅広く思想家・人物がとりあげられている実態が確認された。参考までに複数の教科書索引欄で記載されている思想家・人物と一冊でしか記載されていない思想家・人物を比べると表 17・表 18 となる。表からも明らかのように、これらの傾向は認定シラバス、学会シラバスのいずれにもあてはまる。ただし、学会シラバスのほうが記載回数の少ない思想家・人物の割合がやや高いといえる。

表 17 記載回数ごとの思想家・人物人数（名）
(認定シラバスの教科書索引欄より)

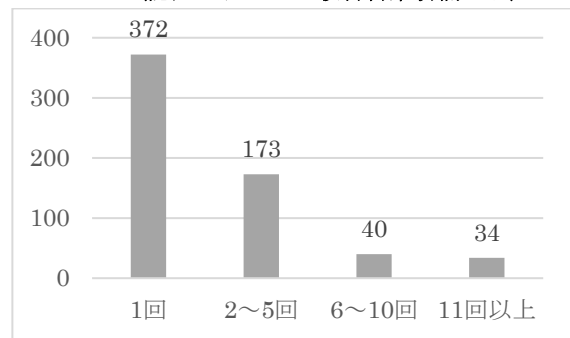
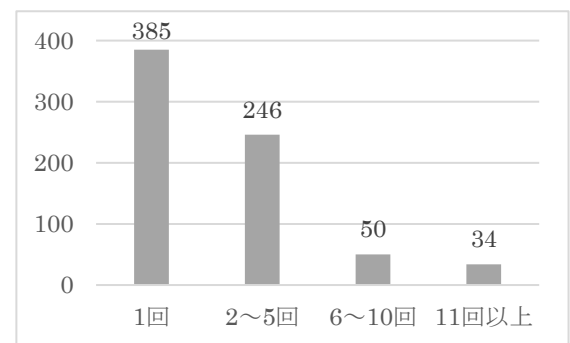


表 18 記載回数ごとの思想家・人物人数（名）
(学会シラバスの教科書索引欄より)



次いで、扱われている思想家・人物の時代区分についても付言しておく。教科書に記載されているページ数に限って言えば、「現代思想」に分類される思想家・人物もとりあげられており、人物によっては複数ページにわたって記述されていた（表 19、参考：表 8、表 9、表 15、表 16）。認定シラバスと学会シラバスとを比較してみると、学会シラバスにおける現代思想の扱いの方が、記述量及び人物数とも多い。

表 19 現代思想の記載回数

	思想家	頁/冊	記載冊数
認定シラバス	フーコー	3.25	13
	ハーバーマス	3.00	12
	アドルノ	2.50	5
	ハイデガー	2.20	5
	ベンヤミン	2.00	11
	レヴィナス	1.00	2
学会シラバス	ジンメル	22.00	2
	ベンヤミン	3.67	3
	フーコー	3.63	8
	ハーバーマス	3.40	5
	ハイデガー	2.33	3
	アドルノ	2.00	3
	アレント	2.00	4
	デリダ	1.00	2
	バタイユ	1.00	2
レヴィナス	1.00	2	

先行研究が指摘するとおり「教育原理」の名称が冠された図書においては「ポストモダン思想の影響はほとんど見られない」であろうが(知念、2017)、シラバスで指定された教科書にまで目を向けてみると、管見の限りではあるが、現代思想の影響を見て取ることができる。それはとりわけ、学会シラバスにおいて顕著であり、授業担当者の専門性や近年の研究内容が反映されていると捉えることも可能であろう。このことはまた「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」を扱う本科目において、従来の近代以前の古典に基づく授業内容から、現代思想やポストモダン思想を取り入れた授業内容への組み替えが徐々に進められていることをうかがわせる証左の一つともなる。

6. おわりに

大学における教員養成は、高等教育としての学問的水準を基盤として、学生たちが教師となる際に必要な最低限の基礎的知識や技能を身につけるための段階である。教職課程において「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」を扱う科目は多くの大学において教職科目の導入的な位置づけを担うとともに、教師を目指す学生にとっては「教育」という営みを総合的・包括的に捉える視座を養うための授業時間となってきた。したがって、一部の思想家や時代のみを形式的に扱うにとどまることなく、また歴史のみ或いは思想のみに偏ることなく、文献等の購読を通して、より深く、また広く教職の基礎を支える教養を養うことが期待されてきたといえよう。

本論文で示したとおり、思想家のとりあげ方について言えば、受講する学生が取得を予定する免許種や学

校種に応じて、内容の選択や扱う思想内容の吟味が求められることは言うまでもないが、今回分析を行った全 41 種の教科書のなかでは古代から現代に至るまで 898 名の思想家・人物がとりあげられていることが明らかとなった。とりわけ、現代思想に関連する思想家については教科書によっては数十ページにわたって重点的な記述がなされているものもあった。こうした裾野の広さや奥行きを深さ保ちながら、現代社会の教育課題に呼応して、歴史や思想が読み解かれ、実践へと活かされるべきであろう。そのサイクルを通してまた次期コアカリキュラム改訂に向けた議論の蓄積がなされていかなければならない。

本論文においては紙幅の都合により、他の項目についての分析については割愛した。また、対象とするシラバスについてもさらに増やして検討される必要がある。これらの課題への取組については他日を期したいと思う。

引用・参考文献

- 綾井桜子、『『教育学の古典』の育成／変容と教育哲学：規範化と歴史家の織り成す諸相』『教育哲学研究』(111)、pp.1-5.
- 知念渉、2017、「教育原理では何が教えられてきたのか：教育原理の教科書分析」日本教育学会第 76 回大会発表資料。
- 下司晶、2016、『教育思想のポストモダン：戦後教育学を超えて』勁草書房。
- 下司晶・木村拓也、2015、『『教育学の古典』に関する意識調査：教育哲学会第 57 回大会研究討議参加者を対象として』『教育哲学研究』(112) p.232-238.
- 教育思想史学会編、2000、『教育思想事典』。
- 牧昌見、1992、『教育原理の研究：教職に関する科目』ぎょうせい。文部科学省、2015、「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について（答申）」。
- 小熊伸一、2017、「テキストブック『教育原理』に関する書誌的研究』『現代教育学部紀要』 pp.35-46.
- 田中卓也・岩治まこと、2017、「保育者養成における講義のシラバス分析とその課題に関する考察：保育内容（人間関係）を中心に』『共栄大学教育学部研究紀要』 pp.49-59.
- 矢野野司、2010、「近代教育学を思想史研究として問うことは何を問うことだったのか：カノン形成から見た教育思想史研究史覚書』『近代教育フォーラム・別冊 教育思想史コメンタール』pp.163-173.

資料 1 分析対象とした教科書一覧

1	『教育の理念・歴史（新・教職課程シリーズ）』田中智志、橋本美保
2	『「人間と教育」を語り直す：教育研究へのいざない』皇紀夫
3	『いま教育を考えるための8章』松浦良充
4	『キーワード現代の教育学』田中智志・今井康雄
5	『ヒューマニティーズ教育学』広田照幸
6	『やさしい教育原理』田島一
7	『よくわかる教育学原論』安彦忠彦
8	『よくわかる教育原理』汐見稔幸
9	『ワークで学ぶ教育学』井藤元
10	『学校の制度を学ぶ』藤田祐介
11	『学校教育とカリキュラム第三版』山田恵吾他
12	『学力と学校を問い直す』教育科学研究会
13	『教育から見る日本の社会と歴史』片桐芳雄他
14	『教育と学びの原理』早川操他
15	『教育の原理』光川康雄
16	『教育の思想と原理：良き教師を目指すために学ぶ重要なことがら』樋口聡他
17	『教育学 21 の問い』沼田裕之他
18	『教育学の教科書』山田恵吾他
19	『教育学をつかむ』木村元他
20	『教育学思考の作法⑤教育哲学の課題-教育の知とは何か』小笠原道雄
21	『教育基礎論（教職課程シリーズ）』谷田貝公昭他
22	『教育原理』寺下明
23	『教育原論の試み』小柳正司
24	『教育思想史』今井康雄
27	『教育思想史で読む現代教育』森田尚人他
28	『教職のための教育原理』内海崎貴子
29	『現代教育の理論と実践』曾我雅比古
30	『子どもから学ぶ教育学』中田基昭
31	『新・教育原論』柴田義松
32	『都市とアーキテクチャの教育思想』山名淳
33	『日本の教育の歴史と思想』寄田啓夫
34	『日本の教育文化史を学ぶ』山田恵吾
35	『日本教育小史』山住正巳
36	『問いからはじまる教育学』勝野正章

資料 2 教科書に記載されていた思想家・人物一覧（計 898 名）

会田雄次、段楊爾、陰山英男、加納治五郎、仁平典宏、蠟山政道、子貢、聖徳太子、多木浩二、渡邊満、山鹿素行、八杉晴実、阿久悠、会沢正志斎、アイゼンハワー、アヴェロエス、アウグスティヌス、赤井米吉、アガンベン・ジョルジョ、芥川龍之介、芦田恵之助、足利尊氏、東浩紀、アスムス、阿直岐、厚広司、アッピア、アップル、アトキン、アドルノ、アナクシマン드로ス、阿部謹也、阿部次郎、天野貞祐、雨森芳洲、網野善彦、アユイ、アラン・ド・ボトン、有馬朗人、有田和正、アリエス、アリストテレス、アリストパネス、アルクイヌス、アルシュテッド、アルチュセール、アルベルティ、アレグザンダー、アレクサンドロス、アレント、安西光義（安西先生）、アントニウス、アンドレーエ、アンリオ、今井康夫、犬飼毅、イーガン、イーグルトン、イーゼリン、イエイツ、イエス、家永三郎、生田久美子、井口文男、池田光政、伊沢修二、石井漢、石上宅嗣、石原千秋、石川啄木、石田梅岩、石堂常世、石井亮一、イソクラテス、板倉聖宣、イタル、市川浩、イッテン、一遍、伊藤仁斎、伊藤博文、伊東玄朴、伊藤道郎、稲毛金七、稲毛詛風、イニス、井上馨、井上達夫、井上哲次郎、井上ひさし、井上毅、イポリット、イリイチ、巖谷小波、梅原猛、ヴァーゲンシャイン、ヴァール、ヴァリニャーノ、ヴァルデンフェルス、ヴァン・マーネン、ヴィクトール、ヴィゴツキー、ウィズビー、ウィッティ、ヴィットリーノ、ヴィトゲンシュタイン、ウィニコット、ウィルダースピン、ウィルトーウィウス、ヴィルヘルム 1 世、ヴィルヘルム 2 世、ウィング、ウーリッヒ、植木枝盛、ヴェーニガー、ウェーバー、ウェーランド、上杉憲実、ヴェルギリウス、ヴェルジェリオ、ヴェルス、ウェンガー、ウオシャウスキー（兄弟）、ウオッシュバーン、ウオノック、ヴォルテール、上田閑照、上田庄三郎、ウシンスキー、内田樹、内村鑑三、梅根悟、ヴェルフ、ヴント、上田薫、栄西、江口勇治、エストライヒ、エッケルト、江藤新平、エラスムス、エリアーデ、エリアス、エリオット・ジェーン、エリクソン、エルヴェシウス、エルカース、エンゲストローム、エンソア、小山内薫、及川平治、王仁、オウィディウス、オウエン、大隈重信、大杉栄、大槻玄沢、大木喬任、大江健三郎、大澤真幸、オースマン、大田堯、大西忠治、大原幽学、大橋訥庵、オールコック、岡田良平、岡田敬司、緒方洪庵、小川未明、岡倉天心、荻生徂徠、奥地圭子、長田新、長田弘、尾崎行雄、尾高豊作、織田信長、落合恵美子、オッカム、オットー、オッペンハイマー、乙竹岩造、小原国芳、オルウェーズ、オルセン、オルポート、オング、金子郁容、ガードナー、貝原益軒、カイヨワ、カウンツ、カエサル、賀川豊彦、加地伸行、カステリオーネ、カスパー・ハウザー、片上伸、ガダマー、ガタリ、勝田守一、香月牛山、カッシーラー、加藤周四郎、加藤尚武、加藤弘之、門脇厚司、蒲田七男、龜山佳明、鴨長明、柄谷行人、茹部直、ガリレイ、カルヴァン、カルキンス、カルゼン、ガレン、河合隼雄、河上亮一、川越修、川島浩、ガンズベルク、カント、カンパネッラ、カンペ、顔回、木村素衛、金正日、金正恩、キケロ、岸本裕史、鬼室集斯、北田暁大、北原白秋、ギブス、ギデンス、木戸孝允、木下竹次、木村敏、金玉均、金日成、清原宣賢、吉良信之、ギリガン、キルパトリック、キング、マーティン・ルーサー、キング・スティーヴン、ギンティス、金時鐘、久保良英、黒田恭史、グアリーノ、グアリーノ・ダ・ヴェローナ、クインティアリヌス、空海、グーテンベルグ、九鬼隆一、グッドマン、熊沢蕃山、クラーク、グライヒマン、クラッペ、倉橋惣三、クラフキー、クランボルツ、グリーン・アンディ、クリック、クリバード、クルプスカヤ、クレー、グロピウス、黒柳徹子、ケアリー、ケイ、ゲーテ、ケーニヒ、ゲレン、ゲゼル、ゲヘーブ、ケラー、ケルシェンシュタイナー、ケンプ、古賀侗庵、小出まみ、河野清丸、孔子、河野敏謙、コーエン、ゴールディング、コールバーグ、古賀謹堂、国分一太郎、五代友厚、コップエルマン、ゴッフマン、後藤新平、小西健二郎、小林一茶、コペルニクス、コメニウス、コラー、コリンズ、ゴルギアス、コルチャック、ゴルトン、コルプ、ゴローニ、近藤文麿、コンスタンティヌス、コンディヤック、コンドルセ、佐藤学、佐藤一斎、サーストン、最澄、斎藤喜博、齊藤桂三、斎藤純一、斎藤武雄、佐伯胖、界利彦、坂本泰造、佐久間象山、桜井祐男、作田啓一、佐々木禎子、佐々木昂、佐々木正人、サッチャー、里見実、ザビエル、サリバン、サルターティ、サルトル、沢柳政太郎、サンガー、サンダース、シーガル、シーボルト、ジェイコブソン、シェーラー、ジェファーソン、シェフラー、シェリング、シェルドン、ジェルピ、慈円、ジェンセン、志垣寛、ジッドウ・クリシュナムルティ、品川哲彦、篠原助一、篠原一、ジブラーン・カーリル、下中弥三郎、ジャクソン、ジャック・ダルクローズ、シャハテル、シャフツベリー、シュヴァルテ、シュヴェンク、朱熹、シュタイナー、シュタッフアー、シュタドラー、シュティルン、シュトイ、シュトラウス、シュバイツァー、シュバイヤー、シュバル、シュプランガー、シュラーダー＝ブライマン、シュライエルマッハー、ジュリアン、シュレーパー、小砂丘忠義、シヨエ、ショーン、ジョンソン、シラー、ジラルル、ジルー、シルバーマン、城戸幡太郎、進藤兼人、シンク、ジンメル、親鸞、新渡戸稲造、スーパー、スキナー、杉本良吉、スコット、鈴木治太郎、鈴木謙介、鈴木智子、鈴木三重吉、鈴木正三、ステッカー、ストウ、ストッダート、スピノザ、スペンサー、スマイルズ、スミス、ズルツァー、世阿弥、セガン、関根宏朗、セネット、セン、千利休、荘子、ソクラテス、ターナー、ターレス、ダイアー、大道寺友山、タイラー、高嶺秀夫、高橋勝、高向玄理、滝川一廣、滝川幸辰、竹内隆夫、竹内常一、竹内利美、竹内敏晴、田崎秀明、田辺繁治、田中寛一、田中耕太郎、田中純、田中二郎、田中成明、田中不二麿、谷本富、谷川俊太郎、為藤五郎、ダンテ、千葉命吉、千葉春雄、チョムスキー・ノーム、津田梅子、土田茂範、ツイラー、ツイレ、ツィンネッカー、壺井栄、坪井玄道、津森真、鶴見俊輔、ディースターヴェーク、ディドロ、ディルタイ、テールハルト、デカルト、手島堵庵、手塚岸衛、テッセノウ、テノルト、テフス、デュエイ、デュボイス、デュルケーム、寺内正毅、デリダ、テンニエス、皇紀夫、ド・レペ、留岡清男、トイニッセン、東井義雄、トゥールミン、陶行知、道元、ドゥルーズ、ドーア、ドーキンス、ドーデ、ドールン.H、ドールン.W、徳川家康、徳川綱吉、徳川吉宗、ドクロリー、トケイヤー、ドベス、トマス・アキナス、トマス・アクティナス、富永繁樹、留岡幸助、ド

モラン、豊臣秀吉、鳥山敏子、ドリーブン、トロウ、中臣鎌足、中江藤樹、中山黙齋、夏目漱石、長尾十三二、中沢道二、中内敏夫、中大兄皇子、中村春二、中村正直、梨木香歩、ナトルブ、ナボコフ、ナポレオン、滑川道夫、成田忠久、成瀬仁蔵、新美南吉、新島襄、ニーチェ、ニートハンマー、ニール、西田幾太郎、西原慶一、西山哲治、西周、西川如見、西谷啓治、西村伊作、西村茂樹、日蓮、新田義貞、二宮尊徳（二宮金次郎）、ニュートン、丹羽徳子、ヌスパウム、野村芳兵衛、野平慎二、ノイトラ、ノール、ノールズ、野口援太郎、野尻精一、ノディングス、野依良治、橋田邦彦、パーカー、パーカースト、パーク、ハーシ、パーソンズ、ハート、バーナード、ハーバーマス、バーモンティエ、ハーロウ、バーンスタイン、楳図かずお、ハイゼンベルク、ハイデガー、ハイト、パイナー、バウアー、ハヴィガースト、ハウシルト、ハウスクネヒト、バウマン、バウムガルデン、パウルゼン、朴泳孝、バシレイオス、パスカル、バセドウ、バタイユ、ハッカライオン、バックル、ハッチンズ、バッハ、パトナム、バトラー、羽仁もと子、バフチン、浜田寿美男、濱尾新、林竹二、林泰成、林羅山、早川政紀、原武史、原田正文、針生悦子、バルト、パルメニデス、バルワー、ハワード、バンクス、ハンスマン、ピアジェ、ピーターズ・ウィリアム、ビーベス、稗田阿礼、ビエスタ、ヒエロニムス、ピカソ、樋口勘次郎、樋口長市、樋口聡、ピコ・デッラ・ミランドラ、久木幸男、ビスマルク、ビネー、百田宗治、ヒュイッセン、ビューヒャー、ビュタゴラス、ビュデ、平野婦美子、平田オリザ、平田ノブ、ヒルガード、ヒルガード、広瀬淡窓、広田照幸、ヒンスケ、フィチーノ、フィヒテ、フィンク、フーコー、ブーバー、フェノロサ、フェリー、フェリペ4世、フォイザー、福沢諭吉、藤田英典、藤原和博、藤原定家、藤原冬嗣、藤原惺窩、フス、フッサール、太安麻呂、プトレマイオス、舟木徹男、ブラウン、プラトン、ブラメルド、フランクリン、フランクル、フリードヒツリ2世、フリットナー、ブルーナー、ブルーニ、ブルーム、ブルクハルト、ブルデュー、フルベッキ、フレイレ、フレーベル、フレネ、フロイス、フロイト、プロタゴラス、プロッホ、プロティノス、フロム、フンデルトヴァッサー、フンボルト、ベイズ、ベイトソン、ヘーゲル、ベーコン、ページ、ペーターゼン、ペスタロッチ、ベック、ベッテルハイム、ペトラルカ、ヘネップ、ベネディクト、ベライター、ヘラクレイトス、ペリー、ベル、ベルグソン、ヘルダーリン、ベルツ、ヘルツェル、ヘルツォーク・ヴェルナー、ヘルバルト、ヘルマン、ベンサム、ヘンスラー、ベンヤミン、法然、北条実時、本田由紀、保坂治男、ポアソナード、ホイジンガー、ボイト、ボウルビィ、ホーキンス、ボードマー、ボードリヤール、ボードレー、ホーフアー、ホープレヒト、ボールズ、ポストマン、細井平州、穂鷹知美、ボッティチェッリ、ホップズ、ホフマン、ホメロス、ポランニー、堀尾輝久、ボルツ、ポルトマン、ボルノー、ホワイト、本多和子、ボンペ、マーシャル、マーティン、マーレンホルツ=ビュロー、マイヤー、マカレンコ、マキャベリ、マクルーハン、マスターマン、マズロー、前田多門、松平定信、マッカーサー、マッキンタイア、マッキンタイア、松下佳代、松本良順、マルクーゼ、マルクス、マルサス、マルセル、丸山高司、マレー、マロツキー、マン、マンフォード、萬里集九、水越伸、ミアラレ、ミース・ファン・デル・ローエ、ミード、三木清、ミケランジェロ、見田宗介、ミッゲ、ミッチャーリッヒ、南淵請安、峰地光重、美濃部達吉、ミノウ、蓑作麟祥、壬生博幸、耳塚寛明、宮台真司、宮原誠一、宮崎俊明、宮里テツ、宮澤賢治、宮澤康人、宮本誠貴、宮本常一、ミュージム、三好達治、ミラー、ミル、村井実、ムーア、向山洋一、夢窓疎石、無着成恭、ムヒョウ、ムホリ・ナギ、村田昇、村上晴彦、村野四郎、室鳩巢、明治天皇、メランヒトン、メルロ=ポンティ、森滝市郎、森田伸子、本居宣長、元田永孚、モア、モイマン、孟子、モース、モーツァルト、モホリ=ナギ、森田尚人、森昭、森有礼、森戸辰男、モルレー、モレンハウアー、モンテーニュ、モンテッソーリ、山県有朋、山上憶良、山田耕筰、山田昌弘、山田洋次、ヤイヤロフ、矢島楯子、安井敏夫、ヤスパース、ヤツビンゼク、柳田国男、柳治男、矢野智司、矢野文雄、山尾庸三、山本鼎、ヤング、湯原元一、湯川秀樹、ユタスキュル、横井小楠、横井時敬、ヨナス、吉田松陰、吉田満、吉田和子、吉田熊次、吉田惟孝、芳川顕正、吉野作造、吉本均、ヨハン・カスパー・フェースリ、ラ・サール、ライ、ライル、ライン、ラトケ、ランガー、ランカスター、ラングラ、ラングフェルト、リーツ、リード、リーバーマン、リーフェンシュタール・レニ、リオター、リクール、リッキー・コラード、リッター、リッテルマイヤー、リット、リルケ、リンカーン、ル・コルビュジェ、ルーマン、ルカーチ、ルソー、ルター、ルペルチェ、レイヴ、レイニンガー、レヴィ=ストロー、レヴィナス、レオンチェフ、レッシング、レディ、レノア・レア、ローズ、ローチ、ローレン、ロゴフ、ロジャーズ、ロック、ロッテン、ロラン、ワーグナー、ワーチ、ワイク、ワイルダー、若林幹夫、若松賤子、脇坂義堂、鷺田清一、和田修二、渡辺淳、和辻哲郎、ワトソン、ワロン、旻